

---

# ハジメテノオト

ミスタ〜forest

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハジメテノオト

### 【Nコード】

N6516D

### 【作者名】

ミスタ〜forest

### 【あらすじ】

初めて出逢った人は、初めて抱いた想いは、初めて聞いた音は、どんな音でしたか？

## ハジメテノコイ

彼女が教室に足を踏み入れた瞬間、僕は朝の気だるさに飲み込まれかけていた意識を取り戻した。

転校を経験した事の無い僕には、現在の彼女の心境を推し量る事は出来ない。

でも、半ば逃げ腰でクラス中の注目を集める彼女に、僕の視線は釘付けになっていた。

頭の中が真っ白になっているであろう彼女に対して、僕の頭の中は、彼女の事で一杯だった。

思わず護ってあげたくなりそうな、少し小柄な体格。

それとはアンバランスな程に長い髪は、彼女のふくらはぎにまで達している。

前髪も割と長く、ヘアピンで留めていなければ、顔の半分は隠れてしまうだろう。

その髪は艶やかに輝いていて、彼女を守る神秘的なヴェールの様に思えた。

髪ばかりに惑わされて、身体に眼をやらないわけにはいかない。

全体的に控え目だけど、どこにも無駄な肉が無くて、まるで高名な彫刻みたいだ。

スカートとソックスの間から覗かせる生足は、それだけで心臓を高鳴らせる。

胸は大きくないけど、彼女の体格なら寧ろ自然だし、中学生だからまだまだ判らない。

大きく透き通った瞳は、視線を合わせると吸い込まれてしまいそうだけど、それでも見てしまう僕が居る。

どうやら僕は、彼女に完全に魅了されてしまった様だ。

彼女は、数多の視線に串刺しにされながらも、先生の隣、黒板の真ん中まで移動した。

不安げな、もしくは助けを求めるかの様な表情で、彼女にとっての新しいクラスメイトを見渡す。

緊張している所為か、彼女は一言も声を発さない。

彼女の声を聞きたくて、僕は、ひたすらに耳を研ぎ澄ませていた。しかし、いつまで経っても、彼女の声が聞こえてくる事は無かった。

何かを喋ろうと必死で試みているのは判るけど、一步手前で止まってしまう様だ。

「……取り敢えず、名前を書いたらどうだ？」

そんな彼女を気遣って、先生がフォローを入れる。

彼女は少し安堵し、縦に大きく首を振った。

チョークを手に取り、黒板に名前を書き始める。

彼女の手と黒板の対比が、彼女の肌の白さを際立たせていた。

チョークと黒板が擦れる音だけが、少しの間、教室を満たす。

黒板には、綺麗な字で『早乙女 紫苑』と書かれていた。

ちゃんと苗字と名前を離していて、横に『さおとめ しおん』と振り仮名まで書いている事から、彼女の気遣いが伺える。

名前を書き終えてから、再び沈黙が訪れる。

緊張しているのは解るんだけど、それでもやはり、僕は彼女の声を聞きたかった。

あの容姿から、果たしてどんな声が奏でられるのか。

僕の興味は、最早それだけに向けられている。

でも、僕の願いは届く事無く、彼女は何も話そうとしなかった。

「ま、まあ、とにかく、今日からこのクラスで一緒に勉強する早乙女紫苑だ。」

新しい学校で緊張している様だし、皆で助けてやってくれや」

これ以上は無駄だと悟ったらしく、先生が少し強引にまとめた。

彼女は済まなさそうな表情を見せるけど、やはりそれを声に出す事は無い。

何故、彼女はここまで何も喋らないのか。

そして、彼女はどんな声の持ち主なのか。

ここまでだんまりを通されると、気になって仕方が無かった。

「じゃあ、お前の席だけど……鳴瀬弟矢」なるせおとや

「……は、はい！」

名前を呼ばれた事に少し遅れて気付き、僕は慌てて返事をした。

「お前の隣に早乙女を座らせようと思うんだが……構わないよな？」  
「は……はい」

殆ど反射で返事をする。

その後で、ようやく事が重大であると気付いた。

可愛い転校生が、隣の席に座る。

漫画とかで使い古された展開が、まさか我が身に降りかかってくるなんて。

僕の心の準備なんて待たずに、早乙女さんは移動を始めた。

一歩ずつ、確実に僕に接近する早乙女さん。

距離が一步縮まる毎に、僕の心臓の鼓動はリズムを早める。

いっそ逃げ出したくなるけれど、身体は身動きさえまならない。

そしてとうとう、早乙女さんが僕の真横にまで接近した。

僕の緊張は最高潮に達し、彼女の髪から香る優しい匂いでも、それは解れなかった。

早乙女さんも、これくらい緊張しているのだろうか。

それとも、早乙女さんの緊張をうつされたのだろうか。

そう思うと、些細だけど早乙女さんと繋がっている気がして、何だかくすぐったい気持ちになる。

そんな事を考えているうちに、早乙女さんは席に着いた。

夢でも幻でもなく、僕の隣の席に、早乙女さんが座っていた。

近くで改めて見ても、早乙女さんは可愛い。

寧ろ、近くだからこそ気付ける事が沢山ある。

ヘアピンのデザインや、ソックスが無地である事、膝の上の手は緊張を握り締めている事。

見る度に新しい発見があって、その度に不思議な気持ちが全身を

駆け巡るのだから、いつまでも見ていたくなる。

でも、そんな悠長な事は言っていられなかった。頭のどこからか、こんな言葉が湧いて出てくる。

「何か……何か声を掛けないと」

どうしてこんな事を考えたのか、僕には判らない。

神の啓示か何かの様に、突然思い浮かんだのだ。

とにかく、彼女に声を掛けなければならぬ。

でも、一体何て言えば良いのだろうか。

僕は、早乙女さんの事を何も知らない。

だから、どう話し掛ければ良いのかも判らない。

それでも、無言でいる事は許せない気がして、僕は早乙女さんの方に向いた。

「よ……よろしく」

勇気を振り絞った結果がこれなのだから、笑わずにはいられない。

案の定、早乙女さんは振り向く事すらなかった。

思わず、僕は静かに溜息を吐いた。

そんな僕に、先生が更なる追い打ちをかけてくるとは、その瞬間まで思わないだろう。

「おい鳴瀬。隣の席になった縁だと思って、早乙女に校内を案内してやってくれないか？」

「え！？」 あ、は、はい……」

やはり反射的に返事をして、後になって事の重大さに気付いた。もちろん、返事をしてしまった以上、後の祭りなのだが。

朝のホームルームの後も、早乙女さんが何かを話す事は無かった。休憩時間にクラスメイトに囲まれても、授業中に先生に当てられても。

結局、転校したばかりで緊張しているからと、昼休みには皆諦めていた。

僕に至っては声を掛ける勇氣すら無いのだから、話にならない。  
こうして、早乙女さんの声すら聞けないまま、放課後を迎えた。  
先生に頼まれたから、早乙女さんに校内を案内しなければなら  
ない。

でも、彼女に何て声を掛けたら良いのだろうか。

朝の一件のお陰で、どうしても声を掛け辛い。

かといって、先生に頼まれた事を放棄する訳にもいかないし……。  
そんな事を考えているうちに、早乙女さんは荷物をまとめ、今に  
も帰ろうとしていた。

「早乙女さん！」

慌てていたので、思わず大声で彼女の名前を呼ぶ。

早乙女さんは少し驚いて、恐る恐る僕の方を向いた。

こんなリアクションをされると、まるで悪い事でもしたみたいだ。

「ご、ごめん、驚かせて……。別に怒っている訳じゃないよ。

先生にも頼まれたし、校舎の案内をしようと思ったんだけど……。時  
間ある？」

僕の問いに、早乙女さんは首を縦に振る。

はい・いいえなら答えられるみたいだから、ちゃんと日本語は通  
じているらしい。

「あのさ、早乙女さん……」

少しだけ、僕はこの続きを躊躇った。

余り触れて欲しくない事だろうし、答えが返ってくるとは思えな  
い。

それでも、まだ誰も訊いていない事だし、言ってみる価値はある  
と思う。

どうせ、朝の一件で、無視される事には慣れたのだ。今更恐れる  
事も無い。

他の人クラスメイトは全員帰ったし、僕と早乙女さんだけで片付  
く話だ。

「どうして、早乙女さんは誰とも話そうとしないのかな？」

僕は、意を決して早乙女さんに尋ねた。

案の定、黙り込む早乙女さん。

どうやら、話そうとする意思はあるみたいだけど……。

この様子だと、口頭での会話は望めそうにない。

果たして、どうやって彼女と意思疎通を図るべきか。

僕は、少しの間考え込む。

考え抜いた末に、僕が出した答えは、

「話せないなら……書くのは良いよね？」

筆談という選択肢だった。

朝のホームルームでも、口では名前を言わなかったけど、黒板にはちゃんと書いていた。

きっとこれなら、少しは話が出来る筈だ。

声を聞く事は出来ないけど、意思疎通すらままならない以上、贅沢は言っていられない。

ノートとペンを差し出すと、早乙女さんは驚いた顔で僕を見て、戸惑いつつも頷き、それらを受け取った。

そして、早速何かを書き始める。

それ程掛からずに書き上がり、早乙女さんはそれを僕に見せた。

『こんな事する人、初めて』

丁寧な字で、こう書かれていた。

形はともかく、初めて彼女と会話が成立し、感動すら覚える。

とにかく、今は会話を繋げる事だけを考えよう。

込み入った話は拒絶されかねないし、こんな会話を重ねるだけでも、今の僕には充分だ。

「早乙女さんがどんな事を考えているのか、知りたかったんだ。それとも、こんな事までして話そうとする人って嫌なのかな？」

僕の問いに、早乙女さんはすぐにペンを走らせる。

『ううん。ここまでしてくれる人って居なかったから。』

私、全然喋れないのに……わざわざありがとう。すごく嬉しいよ』  
かなり好意的な早乙女さんの答えに、僕は心の中で舞い上がって



いた。

女の子にこんな風に言われて、喜ばない男は滅多に居ないと思う。  
早乙女さんの様な可愛い人なら、尚更だ。

『ナルセオトヤ君……だったっけ？』

次に僕に見せたのは、片仮名で書かれた僕の名前。

どうやら、漢字での書き方を問うているらしい。

僕の名前が早乙女さんの前でフルネームで呼ばれたのは、朝のホームルームで先生に呼ばれた時の一度だけ。

その一回で、ちゃんと覚えてくれていたのだ。

僕は、もう一本ペンを取り出し、ノートの端に『鳴瀬弟矢』と書いた。

わざわざ新しいペンを出す必要も無かったけれど、ペンを受け取ろうとして、何かの拍子でその手に触れてしまったら……。

想像するだけで、心臓が爆発してしまいそうだ。

「一回聞いただけで憶えてくれたんだ」

『うん。私、憶えるのには自信があるから。それに、隣の席だから、色々とお世話になりそうだし』

僕の言葉に、早乙女さんは文字でしっかり返してくれた。

早乙女さんが『言葉』を書き終えるまでの間は、不思議なくらいにどきどきする。

喻えるなら、クイズ番組の司会者が、問題の答えを言う前の緊迫感に似ていた。

早乙女さんは、僕にどんな意思を示そうとしているのか。

好かれたのか、それとも嫌われたのか。

そんな事で頭も胸も一杯になって、息が詰まってしまいそうだ。

もちろん、彼女の『言葉』からは、『世話を焼いてくれる人』以上の意思是汲み取れないのだけれど。

『朝は無視してごめんなさい。折角声を掛けてくれたのに……』

次に早乙女さんが見せた『言葉』は、意外な事に謝罪だった。

恐らく、朝のホームルームで、僕が声を掛けた時の事を言ってい

るのだろう。

「別に気にしてないよ。初めての学校で緊張していたんだし、無理もないよ」

実際は、結構落ち込んでいたのだが。

早乙女さんと少しでも接点を持ちたくて、少しでも憶えて欲しくて。

あの時に焦って声を掛けたのは、きっとそういう理由だと思う。それを完全にスルーされては、流石に気にせずにはいられない。でも、こうして謝ってくれたのなら、引きずる理由なんて無い。寧ろ、本当は気配り屋さんで、優しい娘だという事が判ったのだから、収穫の方が大きい。

こうして話す機会が無ければ、早乙女さんの本性が判らないどころか、再び話し掛ける勇気さえ無かっただろう。

そういう意味では、先生には足を向けて眠れない。

『怒ってない?』

そう書かれたノートを持って、早乙女さんは不安げな瞳を僕に向ける。

……その目は卑怯だよ、早乙女さん。

「うん、全然怒ってない」

少しぎこちない調子で、僕は答えた。

怒ってはいないけど、全然違う理由で、血圧は上がりっぱなしだ。こういう時の為の薬があるなら、是非とも薬局を訪ねたい。

そんな僕の気も知らないのだろう早乙女さんは、一人安堵の表情を浮かべていた。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

先生に感謝するならば、頼まれた事はこなすべきだ。

それなりに意思疎通が図れたので、僕は本日最大の任務に取り掛かることにした。

早乙女さんは頷き、僕の後を付いてくる。

果たして、案内が終わるのが先か、僕の心臓が破裂するのが先か。

## ハジメテノコイ（後書き）

初めての方は初めまして、そうでない方はおはこんばんちは。

『暑さも寒さも彼岸まで』が代表作だと信じているミスターです。

普段はコメディやBUMPのファンフィクションをやっていますが、今回は恋愛です。

過去にも恋愛は書いてますが、個人的にあれば黒歴史なので（えなんやかんやでコメディ要素も多いので、私の小説を知っている方は、大体同じ感じで楽しんで頂けるかと）。

知っている方は知っているでしょうし、気付く方は気付くでしょうから、今のうちに弁明しておきましょうか。

……ファンフィクション？ いいえ、インスパイアです。

## カノジョノート

早乙女さんを連れて、僕は校内を歩き回った。

余り近寄りたくない職員室や、薬品の臭いがする理科室。

女の子なら縁が深そうな保健室に、凜とした空気を漂わせる図書室。

今後必要そうな場所は、大体案内した。

当たり前だけど、早乙女さんは必ず僕の後に付いてくる。

僕が渡したノートを、大事そうに抱えて。

その様子は、親鳥の後を追う雛のようで、見ていて愛らしかった。

誰かとすれ違うたびに身体を強張らせるのだから、尚更だ。

横に並んで歩きたいという願望も、あるにはあるけれど。

こうして、残すは音楽室のみとなった。

今なら恐らく、僕のクラスの担任の先生が居るだろう。

先生は、朝のホームルームで、喋れない早乙女さんをフォローしてくれていた。

今の早乙女さんならノートがあるし、お礼を『言う』為にも行くべきだろう。

早乙女さんも頷いたので、僕達は音楽室のドアを開けた。

「失礼します」

僕はそう言って、早乙女さんは頭を下げて室内に入る。

ノートに『失礼します』と書いている早乙女さんに、僕はどう反応したら良いのだろうか。

音楽室の定番である黒くて大きなピアノの傍に、先生は居た。

「おう、わざわざ悪いな」

先生が、僕への軽い労いの言葉で迎えてくれる。

先生は、男性では少し珍しい音楽の担当だ。

鯖をよみ続けて久しいので諸説あるけど、歳は二十代後半の筈。割と若くて気さくなので、この学校の兄貴的存在になっている。

現在は、新任のイケメン体育教師に、勝手に対抗心を燃やしているらしい。

「早乙女さんが、先生にお礼を言いたいそうなので」

「お礼？ 早乙女が？」

驚いた面持ちで繰り返す先生。

僕達の放課後のやり取りを知らないのだから、無理も無いだろう。そんな先生に、早乙女さんはノートを見せた。

『朝は迷惑をおかけしました』

「パンダかお前は……って、お前らの世代じゃ解らんか」

思わぬ変化球だったからか、先生は、リアクションに困っている様だった。

確かに、こんな方法で話されるのは、どうしても戸惑ってしまうだろう。

先生の反応が思わしくない所為か、早乙女さんは不安げな表情で次の文を見せた。

『これじゃダメですか？』

「ま、まあ、よく考えたとは思うが……何か歯痒いんだよな。

取り合えず、お前の苗字でそれをされると、お湯を掛けたくてしょうがない」

早乙女さんの視線に気まづくなったのか、先生はやや遠慮がちに言う。

早乙女さんは小さく溜息を吐き、残念そうに俯いた。

考えた自分が言うのも何だけど、流石にこの方法を誰にでも使う訳にはいかないだろう。

何も知らない人なら、先生の様な反応を示すのが普通だ。

「それに、お前はこっちの方が良いんだろ？」

そう言うと、先生はピアノの蓋を開いた。

これから、演奏するともいうのだろうか。

そんな事されても、歌う人なんて……。

僕がそんな事を考えている横で、早乙女さんが慌てふためいてい

た。

何も喋らないから判り難いけど、少なくとも冷静ではない。

早乙女さんは、慌ててノートに字を書き始める。

「そりゃあお前、教師が生徒の事知らなくてどうするんだよ」

『どうして知』まで早乙女さんが書いたところで、先生は早くも答えた。

コミュニケーションの速度が追いつかず、早乙女さんはどうすることも出来ない。

「ま、世話になった礼だと思って、鳴瀬くらいには教えてやれよ。

お前だって、ちゃんと光り輝くものを持ってるって事を、な」

椅子に座り、指を鳴らしながら先生は言った。

早乙女さんの返事を待たず、先生は演奏を始める。

品が良く、それでいて重厚な音が奏でるのは、聞き覚えのあるクラシック。

この手の音楽に聴くない僕でも知っているけど、タイトルまでは思い出せない。

「早乙女さんはこの曲……!？」

早乙女さんに尋ねようとして、僕は固まった。

さっきまではあたふたしていた早乙女さんが、信じられないくらいに穏やか表情になっていたのだ。

音楽で心が落ち着いたとか、そんな次元の話ではなかった。

穏やかな中にも、どこか張り詰めた面持ちがあり、声を掛けるのも躊躇われる。

まるで、これから舞台にでも上がるかの様な……。

ここで、僕は一つの可能性に思い当たる。

話すことさえままならない早乙女さんに限って、とても信じられないけど……。

早乙女さんは胸に手を当て、呼吸を整えた。

背筋はピンと伸び、胸ではなくお腹で呼吸しているのが見えて判る。

前奏が終わり、そして――。

演奏が終わっても、僕は声さえ出せずにいた。

恐らく、もう二度と忘れる事はないだろう。

早乙女さんの声を初めて聞いた事も、それが歌声だった事も。

湧水のように清らかで、青空のように伸びやかで、虹のように色鮮やかな声。

それが先生のピアノと相俟って、無限とも思える程の音を奏でていた。

外国語だから歌詞の意味は解らないけど、歌い手の想いは、それを補って余りあるものだ。

目の前で起きた事だというのに、にわかには信じる事が出来ない。話す事さえ出来なかった早乙女さんが、こんなにも歌が上手かったなんて。

窓から注ぐ柔らかな斜陽が、余韻に浸る早乙女さんを優しい色に染め上げる。

スポットライトよりも、こっちの方が彼女らしいかも知れない。

「……………!?!」

我に返ったのか、黄褐色の歌姫は、唐突に『早乙女さん』に戻った。

夕景よりも頬を赤く染め、長い髪を身体に巻きつける様にして顔を隠してしまう。

更に教室の隅に逃げてしまうのだから、よほど恥ずかしいのだろう。

でも、僕は確かに見てしまった。

早乙女さんの、固く閉ざした口の向こうにあるものを。

「どうだ？ 結構驚いたろ？」

まるで自分の事のように、先生は少し自慢げに言った。

結構、なんて言葉では済まない位に驚いていたけど、僕は頷く。

それにしても、先生はどうしてこの事を知っていたのだろうか。先生といえども、早乙女さんが口を開くとは思えないのだけど。「今日初めて会って訳じゃないからな。担任として、親とも話し合う場があったし」

考えでも読まれているのか、僕が訊くよりも早く先生は答えた。流石に、親までもがだんまりという訳ではないらしい。

ピアノの蓋を閉じ、そのままピアノに寄りかかって、先生は続ける。

「早乙女の両親は、夫婦揃って劇団員やってな。

それ程大規模な劇団じゃないが、その手の連中の間ではそこそ有名らしい。

うちに転校してきたのも、劇の公演の為なんだとさ」

「それが、歌が上手い事と関係あるんですか？」

「劇の公演ってのは、芝居とショーに分かれてるからな。

才能が全てとは言わないが、蛙の子は蛙って事だろ。

歌の腕前は劇団でも高く買われていて、舞台上歌う事もあるらしいぜ」

「さ、早乙女さんがですか!？」

先生の言葉に、僕は驚きを隠せなかった。

劇団員の娘なら、別に珍しい事でもないのかも知れない。

早乙女さんの歌唱力なら、お金を取っても文句は来ないだろう。

でも、早乙女さんが、観客の前で歌を歌うなんて、僕には想像出来なかった。

「ま、普通は驚くだろうな。俺もそうだった。

けど、面白い事に、歌う時だけはちゃんと声が出るんだと。

それ以外じゃ、親でさえ滅多に喋れないらしいから、筋金入りのだんまりだな」

「親でさえ……ですか」

どうやら、一筋縄でどうにかなる問題ではないらしい。

僕としては、歌う時以外の早乙女さんの声も聞いてみたい。



彼女の生の声を、彼女自身から聞かせて欲しい。

しかし、親相手でさえ口数が少ないのでは、それも絶望的だ。身内でも何でもない僕なんて、一言も話して貰えないだろう。

「どうして、歌以外では声を出そうとしないんですか？」

「そればかりは、本人に訊かないと意味が無いんじゃないか」

そう言って、先生は早乙女さんに視線をやる。

一応は落ち着いたらしく、髪の毛に半分身を隠しながら、早乙女さんは僕達の方を見ていた。

先生が手招きすると、恐る恐る僕達の方に戻ってくる。

こうして、僕は二度目の機会を与えられた。

早乙女さんに、僕が一番知りたい疑問をぶつける機会が。

「どうして、早乙女さんは誰とも話そうとしないのかな？」

教室の時と同じ事を、僕は早乙女さんに尋ねた。

少しは打ち解けた後だし、今ならノートに書くという手段もある。一度目よりも、答えが返ってくる可能性は大きい筈だ。

「……………」

そんな僕の予想に反して、早乙女さんは何も答えてくれなかった。口はもちろん、ノートを書く手すら動かさないのだから、彼女の意思が伺える。

ここまで頑なに話さない理由は、一体何なのだろうか。

それさえも、話して貰わなければ解らないのだから、滑稽としか言いようがない。

「女心に踏み込むには、鳴瀬はまだ若かった、てところか」

「先生、茶化さないで下さい」

先生だけは、何故かやたらと楽しそうだった。

大人の立場から、どうでもいい事で悶々とする子供を眺めるのが、そんなに面白いのだろうか。

睨む僕を意に介さず、先生は早乙女さんに言う。

「これは俺の予想だが……早乙女、お前は、人と話す事が怖いんだろ？」

「……………」

先生の問いに、早乙女さんは俯いて視線をそらした。少なくとも、外れている訳ではないらしい。

「俺も似た様な経験をした事があるからな。その気持ちはよく解る。俺は今でこそこんなんだが、教師なら初めて教壇に立つ瞬間ってのが必ずある。」

あの時は緊張しまくってよ……第一声から声が裏返ったくらいだ。何っーか、視線が痛いんだよな。生徒が俺の言葉を待ってると思うと、迂闊な事言えねーし。

言葉を選び過ぎて、結局何も言えねえ……お前もそんな感じなんだろう？」

「……………」

暫く沈黙した後、早乙女さんは小さく頷いた。

先生は、生徒の立場で物を考えてくれる事で定評がある。

本来は禁止されている、学校行事の後の打ち上げも黙認してくれる。

多感な生徒の為に、学校の裏に『使用済み』の淫猥な雑誌を捨てている事も知っている。

でも、何も喋らない生徒の事を、ここまで見抜けるなんて。

年の功は偉大だな、と僕は改めて思う。

「馬鹿野郎、若いから若いヤツの事が解るんだ。年寄り扱いすんな」  
解り過ぎるのも考え物だけど。

「何で歌は普通に歌えるのかとか、文で書く事は出来るのかとかは解らねえ。」

俺と全く同じ理由で、ここまで人と喋れなくなる事もないだろうしな。

ただ、俺の場合は、とにかく場慣れで克服した。

失敗したり恥をかいたりするのは、決して遠回りじゃねえんだ。そういう事を怖がっていると、いつまでも前に進めねえ。

つまり、早乙女に足りないのは……恥を晒す勇気だ」

「……………!」

早乙女さんのノートを抱く腕に、力がこもる。

先生の言葉に、少なからず反応しているのだろう。

確かに、人と話す勇気が無いという事は、恥を晒す勇気が無いという事だと思う。

恥ずかしいという思いに負けて声が出せないのなら、勝つ為の勇気を養わなければ。

「俺はお前の担任だ。だから、教えられる限りの事は教えてやりてえ。」

担当の科目は勿論だが、人として知っておくべき事も、な。

もし、お前が今の自分を変えたいなら、俺が手伝ってやるが……どうする?」

「……………」

先生に問われ、早乙女さんは黙ったままだった。

少しの間、音楽室が水を打ったように静まり返る。

不意を衝く様に校内放送が流れるけど、僕達には関係の無い内容だった。

それが終わって数秒後、早乙女さんが躊躇いがちなながらもノートに字を書き始めた。

恐らく、先生への返答を書いているのだろう。

早乙女さんは、喋りたいと思ってくれるだろうか。

僕の気持ちだが、一方通行にならずに済むだろうか。

そんな思いで一杯になっている最中に、早乙女さんが、ノートを僕達に向けた。

『よろしくお願いします』

そう書かれているのを見て、僕は胸の奥で歓声を上げる。

早乙女さんが変わりたいと願っているのなら、僕は何でもするつもりだ。

だから、僕は、早乙女さんと普通に喋ってみたい。

恋人……とまではいなくても、せめて友達として。

あの綺麗な声を、歌う時にしか聞けないのは、余りにも勿体無いから。

早乙女さんの事なら、何でも知りたいと思うから。

「よし。ならまずは、恥をかく練習だな。」

恥ずかしい思いをして打たれ強い心を持てば、喋れる様になるだろ。

つー事で、お前にして貰う恥ずかしい事は、そうだな……」

少し考えた後、先生は僕に向けて指を指した。

早乙女さんの視線も、自然と僕に向けられる。

突然の事に驚く僕に、先生は言った。

「今度、こいつとデートしてこい」

ボクたちノケツイ

「先生 ええええええええええええええええええッ！  
相手は教師だとか、自分は生徒だとか、そんな事はどうでも良か  
った。

というより、頭が真っ白で、他の事を考える余裕など無かった。僕は、自分でも信じられないくらいに絶叫し、先生の腕を引っ張っていく。

後先なんて、何も考えていない。

とにかく、このままではいけないという思いでいっぱいだった。隣の音楽準備室に先生を連れ込み、きっちりドアを閉める。

早乙女さんを置いてけぼりにしてしまったけれど、それすらも考へる余裕がなかった。

先生のあの一言の衝撃で、今も僕の心臓は暴れ、肺は大量の酸素を求めている。

間違はなく興奮しているけれど、その割には頭に血がとどいていない気がする。

このまま、何もかも真つ白になって昏倒出来た方が、或いは幸せなのかも知れない。

でも、先生のあの言葉の真意を確かめなければ、僕の学生生活に関わる。

今にも手放してしまいそんな意識を、氣力でどうにか繋ぎ止める。一度は放ち切った酸素をどうにか取り戻し、出来る限り頭の中を整理した。

「……な、何で!？」

それでも、僕の口から出た言葉は、ひっくり返した様な頭から飛び出たそれだった。

「はっはっは。教師ナメンじゃねえよ。」

「早乙女が教室に入った瞬間、お前が早乙女に惚れたのはお見通しだ」

「じゃ、じゃあ、早乙女さんの席が僕の隣なものも、僕に校舎を案内させたのも……!？」

「担任の特権を使ってやったんだぞ。跪いて靴を舐めて欲しいぐらいだがな」

軽いノリで答える先生に、僕は頭を抱えた。

つまり、今日一日、僕は先生に弄ばれていたのだ。

そう考えると、早乙女さんとの一連の出来事が、何もかも先生の笑い声で染まってしまう。

一方、先生のお陰で、僅かながらも早乙女さんとの距離が縮まったという事実も、遺憾ながら存在する。

その所為で、怒れば良いのか感謝すれば良いのか判断出来ない。

「ケツの青いガキ共の色恋沙汰に、面白おかしく首を突っ込む……くうー! これだから教職は辞められねえ! その辺の三ドラマよりよっぽど面白いぜ!」

殺意すら抱いた僕は、やはり責められてしまうのだろうか。

先生ならよくある事だから僕は良いとして、早乙女さんまで巻き込むのは許せない。

「……で、挙句早乙女さんのコンプレックスを利用して、僕とデートさせるんですか」

「おっと、勘違いするなよ。早乙女を手伝ってやりたいのは本当だ。恥をかく練習にお前とのデートを選んだのも、半分は本気だし」

言い方を変えれば、本気なのは半分だけなのだけど。

「訊くまでもないでしょうけど……もう半分は何なんですか?」

「お前の為の援護射撃」

「援護どころか、僕を撃ち抜いてますよ」

背後に味方がいる事が、こんなにも恐ろしく思えるなんて。

でも、確かにこれはチャンスかも知れない。

本来、デートに至るまでには、『恋人同士になる』という絶壁を突破する必要がある。

僕なら、途中で三回くらいは命を落としてしまうだろう。

ところが、先生の提案に乗っければ、迅速かつ確実にデートにこぎつける事が出来るのだ。

もちろん、何もかもが形だけである事は承知している。

それでも、早乙女さんとデートが出来るというのは充分魅力的だ。早乙女さんが傍にいて、早乙女さんをずっと見ていられて、早乙女さんと同じ事をする。

そんな事を想像するだけで、身体中が熱くなってしまう。

落ち着いて考えれば、デートでする事なんて、一人でも充分出来る事だろう。

外食する事も、映画を観る事も、景色を眺めながら散策する事も、わざわざ他人と一緒にする必要など無い。

けれど、デートで一番重要なのは、何をするかではない。  
好きな人が隣にいる。これに並ぶ幸福なんて、宝くじで一等でも当てない限り存在しないだろう。

好きな人が出来た今、僕は改めてそう思う。

それに、これを機に仲良くなれる可能性も、僅かながら決して否定する事は出来ない。

第一、これは早乙女さんが喋れる様になる為にする事なのだ。  
形式的とは言えデートをするなんて、この歳では恥ずかしい事この上ない筈。

実際、今でさえ、僕は恥ずかしくて仕方が無い。

その恥ずかしさを乗り越えれば、喋る勇気が湧くかも知れない。

つまり、この案は、お互いにメリットがあるのだ。

先生の野次馬魂に踊らされている気がして癪だけど、ここは……。

「……そういえば、先生」

「ん、どうした？」

舞い上がっている最中、僕はとんでもない事を思い出してしまった。

今日一日の全てを、何もかも覆しかねない事を。

あの時は何事も無く流したけど、これは決して無視する事が出来

ない。

「先生言いましたよね。早乙女さんの両親は劇団員で、公演の為に転校してきたって」

「ああ、確かに言った」

「だったら……またすぐに転校するんじゃないか……？」

「まあ、そうなるな。つか、今頃気付いたのか」

当然の様に答える先生に、僕は目の前が真っ白になった。

ようやく見えた一筋の光明が、追いかけるよりも速く遠ざかっていく。

あの時に気付けば良かったと、今になってようやく思う。

ついさっきまでの頭の中がお花畑な僕が、急に馬鹿馬鹿しく思えてきた。

またすぐに転校してしまうなら、いくら足掻いたって無駄ではないか。

「どうした？ 青菜に塩撒いたみたいになっちまいがって」

「だって先生……どうせすぐに転校するなら、仲良くなんてなれっこ……」

そこまで言って、僕は固まってしまった。

何となくだけど、気付いたのだ。

早乙女さんが、異様なまでに口を閉ざす理由に。

これだけでは、何もかもを説明する事は出来ない。

でも、少なくとも理由の一つではあるだろう。

だとしたら、僕はここで諦める訳にはいかない。

時間が少ない事を理由に、仲良くなる事を諦める訳にはいかない。

「……判りました。先生の計画に乗ってあげます。というより、是非乗らせて下さい」

「さっきから何なんだ？ 態度が二転三転して面白いけど。」

ま、今は携帯やらパソコンやら色々あるし、距離なんて大した障害にならないだろ。

とにかく、これで、あとは早乙女の返事次第だな……何が何でも領



かせてやる」

僕は確かな決意を、先生は迷惑な好奇心を胸に、置き去りにした早乙女さんが待つ音楽室へ向かった。

音楽室に戻ると、一人残されてそわそわしている早乙女さんが迎えてくれた。

「ごめん、いきなり独りにしちゃって」

僕が謝ると、早乙女さんは首を横に振った。

どうやら先に書いていたらしく、ノートを僕の方に向ける。

『何かあったの？』

至極もつともな質問に、僕は答えられずにいた。

いくらなんでも、向こうで起きた事をそのまま伝える訳にはいかない。

転校初日の人に告白なんて、地球の危機を三回救うよりも難しいだろう。

適当に誤魔化せば良いのだろうけど、目が合うだけで心臓が高鳴ってしまい、言い訳を考える余裕など無い。

早乙女さんの可愛らしさに何も出来ない僕に代わって、先生が答えてくれた。

「いいか早乙女。男にはな、女には理解出来ない、男だけの世界があるんだ」

合っているのかも、誤魔化せているのかも判らないのが、少し心許無いけど。

『男だけの世界……ですか』

早乙女さんは、わざわざ書いて先生の言葉を反芻した。

そして、さっき程じゃないけど、何故か頬を染める。

一体、早乙女さんは何を想像したのだろうか。

何となくだけど、男には理解出来ない世界を作り上げている気がしてならない。

というより、先生の言い方だと、そういう方向にしか聞こえない。「それはさておき……早乙女、さっきの話だが、オーケーしてくれるよな？」

明らかに頷く事前提で、先生は早乙女さんに尋ねた。

これも前もって書いていたらしく、早乙女さんはすぐに返答を見せる。

『私は良いんですけど……鳴瀬君は迷惑じゃないですか？』

転校してきたばかりの人とデートだなんて……。

こんな方法でしか会話出来ませんし、多分楽しくないですよ？

デートって好きな人と行くからこそだと思えますし、鳴瀬君に嫌な思いをさせるのは……』

早乙女さんらしい、気遣いに溢れた答えだ。

彼女の優しさに胸が温まると同時に、何だかやきもきしてしまう。

僕は嫌だなんて全く思っていないし、寧ろ大歓迎なのに。

だったらそう言えば良いのだけど、何事も理屈通りに事が運ぶ訳ではない。

悩む僕を尻目に、先生は笑いを堪えるのに必死の様だった。

「まあ、その、僕の事は気にしなくて良いから。早乙女さんの……クラスメイトの為だし。」

僕で良ければ、出来る限りの事はするつもりだから、ね？」

「……………」

ノートを抱えて、早乙女さんは俯いた。

突然こんな話を持ち出されたのだから、悩むのも無理は無いだろう。

僕にとっては美味しい話でも、早乙女さんはそうではない。

それでも、僕は早乙女さんが頷いてくれる事を願った。

好きになった女の子と、少しでも距離を縮めたいから。

それ以上に、少しでも早乙女さんの為になりたかったから。

もしかしたら、さっきの答えは建前なのかも知れない。

本当は、僕とデートするなんて嫌なのかも知れない。

そんな不安が、僕の頭の中を過ぎる。

しばらくして、早乙女さんがついに顔を上げた。

震える手で、ノートに字を書き始める早乙女さん。

準備していなかった答えを、ノートに委ねる早乙女さん。

僕は、その返答を胸を詰まらせながら待っていた。

そして、彼女の思いが込められたノートが、僕に向けられる。

『鳴瀬君が構わないなら、私に断る理由はありません。』

私なんかじゃ楽しくないでしょうし、恥ずかしいですけど……よろしくお願いします』

三回、僕はその文章を読み返した。

加えて、どこかに小さくでも拒否する文が無いかをチェックする。一通り終えて、これが間違いなく早乙女さんの意思である事を確認すると、

「……………」

僕の言葉は声にすらならなかった。

頭の中が何かでいっぱいになって、喉をも詰まらせていくのが判る。

それが『喜び』である事に気付くまでに、暫し時間を要した。

未だ嘗て、ここまで嬉しいと感じた事があっただろうか。

恐らく、第一志望の学校に受かったとしても、ここまでの感情は抱かないだろう。

仮初のデートですらこれなのだから、恋人同士にでもなったら、どうなってしまうのだろうか。

思春期故の甘酸っぱい妄想が、洪水の様に僕を押し流していく。

「決意してくれたか……よし、後は俺に任せとけ。」

『ドキッ！ハニカミだらけの青春デートプラン（ポロリもあるよ）』  
を考えておいてやる」

「深夜に一人で見たくなる様なプランを立てないで下さい」

そんな空気を数秒でぶち壊した先生に、僕は少し冷たくツツコンだ。

先生との年の差が幸いしたのか、早乙女さんには意味が伝わらなかったらしい。

意識しようとする早乙女さんを妨害する為にも、僕は早乙女さんに言う。

「じゃあ、その……僕の方こそ、よろしく」

『うん。少しでも喋れるように頑張るから』

やっぱり、早乙女さんにとっては、あくまでも喋れる様になる為のデートでしかないらしい。

判り切っていた事だけど、一抹の物悲しさは拭えない。

でも、少なくとも『良い人』の評価は得られた筈だから、初日としては上々だろう。

「もう案内は終わったから、そろそろ帰った方が良いんじゃないかな。」

女の子一人で帰るのは、遅くなると危険だし。それに、転校初日で疲れてるでしょ？」

早乙女さんは頷き、『今日はありがとうございました』と書き残して、音楽室を去っていった。

退室の時にも、深々と頭を下げて、やはり『失礼しました』と書いたノートを持っていた。

……礼儀正しいのか、どこか抜けているのか、どっちなのだろうか。

ともかく、こうして僕の初恋は、多少歪ながらも確かに前進したのだった。

「良かったな、鳴瀬。これでお前の彼女いない暦Ⅱ年齢に終止符だ」

「僕、まだ十四歳ですけど」

「まあ、こういうのは早いうちに慣れた方が良いつて。」

下手に年食ってからだと、なまじ金と地位持つてるからエライ目に遭うぞ。……マジで」

「……実体験、なんですな」

この人が主導なのが、頼もしくもあり不安でもあるけど。

## ボクたちノケツイ（後書き）

初回ということで、一気にここまで公開します。  
ここから先は、下書きすら一切出来ていないので、次話はいつになるやら（何

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6516d/>

---

ハジメテノオト

2010年10月12日03時53分発行